

論文要旨

【学位論文題目】

農村に移住する若い女性と身体化される「場所」—福島県昭和村からむし織体験生「織姫」の語りから—

【氏名】久島 桃代

本博士論文は、福島県昭和村に移り住んだ「織姫」と呼ばれる女性たちを取り上げ、昭和村の何が彼女たちをこの場所に繋ぎ止めているのか、また、「村を出る／出ない」の選択の狭間で揺れながらも、それでも村に残ることを選択する彼女たちにとっての、村での一瞬一瞬の意味を考えることを目的とする。以上の検討により、農村に移り住む女性たちと場所との関わりのリアリティに迫りたい。

福島県昭和村では、1994年から「からむし織体験生制度」（以下「織姫制度」）と呼ばれる制度を実施している。ここでは、「織姫」「彦星」と呼ばれる体験生たちが約1年間にわたり村に住み込みながら、昭和村の特産品であるからむし織の製作を体験する。からむし織の「からむし」とはアサ科の植物で、会津では戦国時代から生産が始まったとされ、越後地方に送られたからむしは、越後上布・小千谷縮の原料となってきた。しかしながら、戦後、着物需要が低下したり、化学繊維が普及したりするようになると、昭和村のからむしは売れなくなった。その打開策として1970年代に誕生したのが、村特産の織物「からむし織」だった。

村に残った織姫たちにその理由を尋ねても、「苧引き（からむしから繊維を取り出す作業）を続けたかったから」「一番の理由はからむし」という簡潔な答え以上の説明を引き出すことは難しい。彼女たちの人生（ライフ）の中で、からむしはどのような意味をもった存在として立ち現われるのか。また、身体を通じてからむしと関わる中で、昭和村という場所への彼女たちの思いはどのように形成されるのか。これらの問いを考えるため、本研究では方法論としてライフストーリー・インタビューを、理論的枠組みとしては非表象地理学の議論を採った。

非表象地理学とは、英語圏の文化地理学、社会地理学において2000年代に入ってから注目を集めるようになった、空間や場所に関するオルタナティブな視点、記述法を指す。それまでの地理学では、場所に込められた意味や記号を解読する表象研究が主流を占めていたのに対し非表象地理学では、表象された景観だけではなく、それが個々の人々にどのように了解され、結果的に彼らの体験をいかに方向付けるものなのかまで問題にする。ここでは、身体と場所との五感を通じた遭遇においてこそ場所の意味は構築されるとして、身体的実践の具体的な中身に注意が向けられる。本研究では、からむし織という身体的実践がどのような内実をもち、織姫たちの生き方にどのように作用しているのかを明らかにするため、筆者自身も「移住女性」

となった上で、参与観察とライフストーリー・インタビューを行った。移住に踏み切った理由は、「芋引きを続けたかったから」というような、昭和村で暮らし、からむしに触れた当事者でなければ理解できないような「感覚的な」語りを理解するためには、私自身の身体をもって昭和村を体験・体感する必要があると考えたためである。

本研究は、織姫となった女性たちの経験や場所への思いを考察するものであるが、一方で彼女たちが村で置かれている立場や状況にも留意する。からむしで生計を立てることが困難なために、織姫たちが村で長くからむしに関わるためには、村で安定した職業に就く男性の配偶者になることが条件となる。そうでない場合、未婚の織姫たちは場所と不安定な関係を持たざるをえない。また織姫たちは、村人たちから多かれ少なかれ村の再生産労働を期待されている。以上の点から、「織姫」になること、「織姫」として村で生きることは、ジェンダーやセクシャリティの問題とも交差しているといえる。織姫たちの思いを把握する際には、このような織姫たちの現状を取りこぼしてはならず、こうした状況が彼女たちの実践や内面にどのような影響を及ぼしているのかまで考察する必要がある。

以上の問題意識に基づき研究を行った結果、以下のことが明らかとなった。上記のような織姫たちの状況は、村で生活することを「1年くらいしか考えられなかった」というような、非常に「刹那的」な織姫たちの場所感覚を形成していた。そして、そのような場所感覚を持っているということが、彼女たちをからむしの作業に向かわせる大きな動機づけともなっている。また、からむしの収穫や芋引きといった身体的な作業に村人たちとともに関わることは、村人たちと彼女たちの間に確かな信頼関係をつくり、それが彼女たちとからむしとの関わりを持続的なものにしたたり、彼女たちを村に残らせたりする要因となっていた。さらに織姫のなかには、芋引きの作業に没頭するなかで、刹那的であるはずの場所感覚のなかに「昭和村で今生きている」ことの確からしさを実感している人もいた。

また、織姫たちのライフストーリーからみえてきたのは、村の中で脈々と営まれてきた栽培を中心としたからむしの文化が、これに感化された織姫たちの生活の中で生きられているということであった。からむしという文化に感じる魅力を動機づけとしながら、織姫たちは積極的な働きかけをおこない、多様な実践を生み出してきたのである。